

碑文の大意

碑文

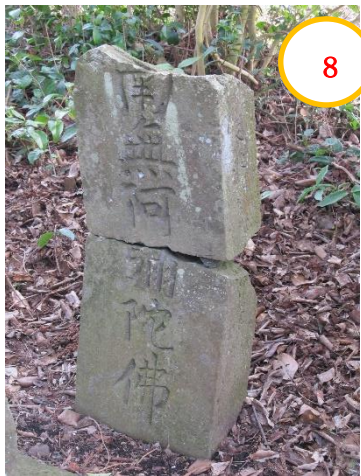
郷向寛政十一己未秋豊前州中津自性寺海門和尚行性之路次過此鑛野之日教示某信男勸念仏三昧爾来一人唱誦千辺展転遷千一千余人集功至大也幸今春値東源禪寺之勝会願主拜諸東禪一山禪師乃一百五十余員之清衆以伸供養之儀回法界 銘碑
伝之不朽 享和元年 西三月

東奥会津圓藏隱栖 天龍誌焉

寛政十一年（一七七九）秋、豊前国中津（現・大分県中津市）の自性寺の海門和尚が行任（行托の意であろうか？）の途次この曠野を通りかかり某信男（信仰心の厚い善男子）に教示し念仏三昧をんぱんを勧めた。爾来一人で唱誦を続けたが、次第にこれが多く人たちに屢（ひるがり）、遷（うつす）りて、ここに一千余人を救えるまでに至った。（碑銘にいう講中千七百五十二人のことを指しているものであろうか）。その功績は至って大である。幸い今ここに東源寺の勝会（法要）に値（あう）ことができた。願主（夜久伝七）諸東禪に拜し（東源寺関係の諸寺院に願い）一山禪師（東源寺ならびにその一山の諸僧侶）および一百五十五人の清衆（善男女）が集り、以って供養の儀を行い、法界（ほっかい）万物を包容する全宇宙に回まわらすものである。よりにて碑に銘し、之を伝えて朽ちざらしめんとす。

⑧名号塔

阿弥陀如来をたたえて「南無阿弥陀仏」と唱えるが、この「南無阿弥陀仏」のことを名号、または六字名号と呼んでいる。名号塔には「阿弥陀仏」の四字もの、「南無阿弥陀仏」の六字のもの、あるいは九字からなる「南無不可思議光如来」、十字の「帰命尽十方無量光如来」などがある。しかし、ふつう名号塔で見かけるものでは六字名号が圧倒的に多い。こうした意味での名号塔の出現は、当夜久野地方で見られるようになるのは、現在判明している限りでは江戸時代に入ってからである。



文政八乙〇月日
 南無阿弥陀仏
 世話人 白井村〇〇助
 一応〇信女 金浦講中
 (註、文政八年一八二五
 高さ七十八cm・幅三十一cm・厚さ三十一cm
 の平角塔である。塔身の上部が欠損し、か
 つ中程でヒビ下二つこ所貫つてゐる。

⑨ 山陰線夜久野トンネル工事犠牲者の供養塔



右側面	明治四十三年七月九日死去 夜久野隧道東口渋谷使役人
正面	釋 清涼 信士
左側面	岡山県川上郡中村大字相坂坑夫藤井兼蔵行年四十二才
裏面	間組出張所配下壹統坑夫壹同建之

明治25年(1892年)
 鉄道敷設法公布
 明治33年(1900年)
 山陰線工事着工(京都~今市間)
 明治39年(1906年)
 鉄道国有法公布 8月 工事区間の
 実測終了

鉄道建設史に残る山陰本線東線(福知山と和田山間)の工事記録によると、かなりの難工事区間であったとしている。着工以来約三ヶ年の長年月を要し、明治四十三年米価一升十三銭余の時代に工事費は三十万五千三百余円という大工事でもあった。当時、磯部出身の工事作業員として働いていた古老への聴き取り調査によると、大工事・難工事であった関係上、工事中の死傷者も相当数あり死者三人の火葬を目撃したことがあるとのこと。

⑩内藤孫四郎三百廻忌供養塔

内藤孫四郎とは丹波八木（船井郡八木町）の城主・丹波守護代内藤備前守孫四郎貞徳のことである。かの応仁の乱（応仁元年―文明九年。一四六七―一四七七まで十一年間にわたった戦争のことで、別名、応仁・文明の乱ともいう。東軍の細川方と西軍の山名方の二大陣営に分かれて戦う大規模な内乱に発展したが、結局勝敗を決する前に、山名宗全・細川勝元が相次いで没したため、自然消滅の形で、その帰結を見ることなく終わっている。内藤孫四郎は、この戦いにおいて東軍の細川方につき、夜久野の合戦で討ち死にしている。中路重次とは、内藤孫四郎を討ち取った中路新左工門の子孫である。

供養碑建立はまことにゆかしい

美談である。なお、夜久野町小倉の塔の山に宝篋印塔が一基建っているが、古くより「内藤孫四郎の首塚」と伝えられている。

10



千日内三百日廻向塔（えこうとう）

廻向↓死者のために仏事を営み、冥福を祈ること。

この供養塔は日限を限ったものである。千日間に三百日廻向を行っている。また、この塔は道標も兼ねたものであって、道標としては紀年銘（紀元から起算した年数）で見る限り夜久野地方で最も古いものである。建立者は、伊勢伊高郡坂内村南札とある。これは、現在の三重県松坂市内と考えられる。

宝暦十三末年三月廿日

内藤孫四郎三百廻忌

但馬朝来郡諏訪村

施主 中路重次

南無妙法蓮華經

（註、宝暦十三―一七六三年）

